



令和5年度

地域経済政策推進事業費補助金

(被災12市町村における地域のつながり支援事業)

取組事例集

はじめに

本事業は、福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム）の個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、令和5年度「地域経済政策推進事業費補助金（被災12市町村における地域のつながり支援事業）」を実施しています。

震災から13年目を迎えた被災地域で帰還された皆様が、復興やまちづくりに熱い想いを持って取り組んでおり、着実に地域コミュニティの再生に向けて歩みを進めておられます。そして、避難先においても被災者の皆様は人と人との新しい交流やふれあいを通じて、生きがいややりがいの創出につながる取組を続けておられます。

令和5年度において、地域の自治体や関係団体の皆様の協力のもとに取組を行った皆様の一例をこの事例集にまとめさせていただきました。福島県や被災地域のみならず、全国の皆様方にこれらの取組による復興への歩みにご理解を深めていただくとともに、被災された皆様が今後これらの取組を参考に、新たな人々のつながり創出や、さらなるコミュニティ再生へ向けて活動していくための一助となれば幸いです。最後に、この事例集の作成にあたり、取材や資料のご提供などにご協力いただきました各取組団体の皆様をはじめ多くの関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和6年3月

株式会社ジェイアール東日本企画

令和5年度地域経済政策推進事業費補助金

（被災12市町村における地域のつながり支援事業）事務局

目次

被災12市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

01. 唄・舞・楽の共演により被災者の健康づくり・絆づくりを進める取組み 3
(対象者:南相馬市／実施地:南相馬市)
02. 片草行政区 如意輪観世音様 縁日祭 4
(対象者:南相馬市／実施地:南相馬市)
03. 山木屋夏祭り 5
(対象者:川俣町／実施地:川俣町)
04. 川内村×玉川大学つながり創出勉強会 6
(対象者:川内村／実施地:川内村)
05. グランマキルト会 7
(対象者:浪江町／実施地:いわき市)
06. 津島の賑わいを取り戻すHop(第一歩) 8
(対象者:浪江町／実施地:浪江町)
07. さあ行くべ!つしま肉まつりによる住民同士の交流事業 9
(対象者:浪江町／実施地:浪江町)
08. いいたてナイター 駅伝 10
(対象者:飯館村／実施地:飯館村)
09. 小さくても魅力ある学校づくり 11
(対象者:田村市、葛尾村／実施地:田村市)
10. 飯館村の冬花火とキャンドルワークショップ 12
(対象者:南相馬市、飯館村／実施地:飯館村)
11. 「草木染でつながる那須のコミュニティづくり」 13
(対象者:浪江町、富岡町／実施地:栃木県)
12. 川俣町コミュニティ形成事業 14
(対象者:川俣町、浪江町、飯館村／実施地:川俣町)
13. 令和5年度木戸川鮎祭り 15
(対象者:広野町、榎葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、いわき市／
実施地:榎葉町)
14. 「親子で学ぶこれだけは知っておきたい、
まとめて防災ふれあいステージ」 16
(対象者:田村市、南相馬市、川俣町、広野町、榎葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、
葛尾村、飯館村／実施地:大熊町)

※掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。

唄・舞・楽の共演により 被災者の健康づくり・絆づくりを進める取組み

取組の概要

震災で避難を余儀なくされた浪江町民が心身ともに疲弊する様子を見て、「この人たちの笑顔を取り戻してあげたい」という思いから、平成25年に淑美会を立ち上げました。会では、復興住宅や老人ホームなどへの慰問活動ボランティアとして唄や踊りを披露してきました。本取組では唄や踊りを通じて、被災された方々が一同に会する場を設けました。このイベントに参加することによってコミュニティが再構築され、町民の心身の健康と絆づくりにつながることを目的としています。



取組の様子

令和5年7月に南相馬市民文化会館で「唄・舞・楽の共演復興祭」を開催しました。当日は淑美会が主催した唄をかわりに、地元出身の民謡歌手、演歌歌手、トランペット奏者、エレクーン奏者が歌やさまざまな演奏を披露しました。また、同じく地元の方々によって披露された、モダンバレエやチャリーディング、ベリーダンス、フラダンスなどの舞も大盛況でした。今年度はプロの演歌歌手にも舞台上に上がっていただくことができ、満席の会場は歓声による熱気に包まれていました。

地域の人々は避難生活の中で、家族の離散や、友人・知人との別れなどを経験しています。地域から孤立し、孤独な思いを抱えている方も多くいます。そのため、このイベントへ無料で招待し、心の底からの笑いや感動を同じ場で共有してもらうことは、こうしたストレスや不安を和らげるものになります。イベントを通じたコミュニティ形成によって、人的な復興を図ることは、町の復興にもつながるものと考え、本取組を実施しました。

実施者の声

バラエティに富んだプログラムは、観覧された方から高い評価をいただきました。会場の盛り上がりと熱気を肌で感じ、実施者としてのやりがいを感じることもできました。舞台の上で芸能を披露された方々も、満席の会場で大きな舞台に立てたことに感動していました。少しでも参加された方々の癒しの糧となるよう、ぜひ、次年度以降も取組を継続していきたいと考えています。

参加者の声

「構成が素晴らしいステージを見ることができました」「久々に会う友人とこのイベントに参加することができて、とても良かったです」「老若男女で楽しむことができました」「知人に多く会うことができて嬉しかったです」「開催するまでの苦労は計り知れません。感謝でいっぱいです。ぜひ末長く続けてほしいです」

取組の概要

南相馬市小高区片草に伝わる観音縁祭を、13年ぶりに復活させる取組を行いました。震災による地域の人口減少の影響で、長い間大切にされてきた地域の伝統行事を途絶えさせることのないよう、祭りを再開させました。本来は、青年団を中心に老若男女を問わない夏の風物詩として地元住民から親しまれていた祭りです。祭りを再開させることで、もともとあった地域の強いつながりを取り戻すことを目的としました。



取組の様子

本取組では、1557年に建立された片草観世音様の境内で、13年ぶりに観音縁日祭を開催することができました。祭りでは、キッチンカーで焼きそばや、かき氷などを販売したほか、金魚すくいやビンゴ大会など幅広い世代が楽しめる工夫しました。また、青年団や行政区のメンバーで樽を組み、夕方からは盆踊りも開催。祭りを盛り上げる太鼓や笛は、20～30代の青年団とOB約20名がこの日のために練習を重ねて演奏しました。

小高区は、震災によって祭りの担い手であった若い世代が県内外に避難しました。避難解除後も若年層の帰還が進まず、地域は高齢化が進む一方でした。こうした背景から、世代を越えた地域住民同士が交流を図り、親睦を深める必要があると考えました。震災以降、放置状態だった片草観世音様の境内とその周辺の整備・整地が少しずつ進んで来ました。そこで、地域内外にいる地元住民が再び集まって、13年ぶりの観音縁日祭を再開することにしました。祭りを行うことで、多くの家族や友人・知人との再会を実現させることができました。

実施者の声

13年ぶりの祭りはとても盛況で、地域の住民同士が明るく語り合う姿や、子どもたちの無邪気な歓声を多く聞くことができました。長きにわたって中断された縁日祭を再開させるためには、多くの準備が必要であり、反省点もありましたが、開催には手応えを感じています。そのため地域住民のコミュニティ再生と更なる地域の復興を目的に、次年度以降も計画を整え、継続的に開催します。

参加者の声

「小学生の私は、小高区で初めての盆踊りに参加できて、とても楽しかったです。また来年も踊りたいと思います」「祭りが再開したことで、地域の人たちが再び集まることができました。久しぶりに見る顔ばかりで懐かしく、話ができとても嬉しく思いました」

取組の概要

川俣町山木屋地区は、避難などの影響により人口が7割減となっています。特に、若年層は避難先での就業や子どもの就学などによって、他地域での生活基盤が構築され、避難指示解除後も町に戻って来ていません。そのため、地域での世代を越えた交流の機会は、非常に限られたものになっていました。

そこで、若年層が帰省する8月15日に夏祭りを再開することにより、新たな人々とのつながりを創出できると考えました。



取組の様子

夏祭りは、山木屋地区の中心街かつ復興拠点である「とんやの郷」を会場としました。準備は、山木屋自治会の事務局と連携して行いました。会場の設営は、女性会による飾り花の制作から始まり、前日には盆踊り用の櫓を設置。夏祭りの当日は、山木屋を象徴する山木屋太鼓の力強い演奏が行われました。地域の方々の協力によって、飲食店のほかにも、無料の射的や輪投げ、ヨーヨーすくいなど、子ども向けの露店を多数出店することができました。大人も子どもも、夏祭りを大いに楽しんでいました。また、運営面では、日頃から地域の活動を力強く支えるボランティアスタッフによる駐車場誘導などもあり、地域ゆかりの方々が一丸となって参加者を迎えました。

来場者全員が輪になって櫓を囲んで盆踊りを楽しみ、イベントの最後は花火も打ち上げ、「山木屋で過ごした日」を多くの人の心に刻むことができました。山木屋地区の住民は元より、地区外から訪れた老若男女が楽しむことのできる、笑顔あふれる取組になりました。

実施者の声

地域の輪を描いて、来場者とひとつになる内容の夏祭りを開催することができました。特に、打上げ花火の満足度が高く、大きさではなく距離も大切だということがわかりました。今回の祭りの準備や運営は川俣町福田地区の方々にも協力していただきました。当日の会場には、避難している方、移住した方、そして近隣の市町村からも多くの方々が参加しました。担い手不足が課題となっている山木屋地区としては、夏祭りをきっかけに地域間交流を大切にし、今後の活動につなげていきます。

参加者の声

「久しぶりに知り合いに会うことができ、良かったと思います」「夏祭りイベントのスタッフのみなさんが親切で、とても楽しかったです」「目の前で花火を見ることができて素晴らしかったです」「他地区からきましたが、山木屋にまた遊びに来たいと思います。来年の夏祭りにも遊びに来ます」

取組の概要

川内村と玉川大学の臨床心理学ゼミは平成26年から交流を続けています。村には大学がないため、子どもたちが大学生と触れ合うことで、自分の将来の姿を想像することにつなげる目的があります。本取組では「縁日」をテーマに、子どもたちが遊びを通して、さまざまな人と交流することを目的としました。もう一つのテーマである「学習支援」も加味し、「縁日」と「学習支援」を通じたつながりの創出を目指しました。



取組の様子

「縁日」では、大きく4つの遊び(ボウリング・輪投げ・スーパーボールすくい・心理テスト)を実施しました。「学習支援」では学習を楽しくする体験してもらうことを意識して、苦手な科目や夏休みの宿題の仕上げを手伝いました。子どもたちの安全を考え、活動場所は川内小中学園の一部とコミュニティハウスにじいろで行いました。

遊びの準備は大学生が事前に手作りで行いました。4つの遊びを順番に体験してもらうことで、自分の得意を見つけたり、自分の性格を知ったりすることができました。また休憩スペースも設け、参加者同士や迎えにきた保護者とも話せるよう工夫しました。子どもたちはかなり興奮気味で、笑顔による輪のつながりを生み出すことができたと感じています。

「学習支援」では、勉強に対して苦手意識があり、宿題を夏休み最終日まで溜めていた子どもに対しては勉強の支援を行い、既に宿題を終わらせている子どもには学校にある多様な教具・玩具(ブロックやピアノなど)を用いて、笑顔のある交流を図りました。参加した子どもたちや保護者は、充実した夏休みのイベントを通して、新たなつながりを創出できました。

実施者の声

私たちが準備した道具を使って、子どもたちと一緒に汗をかきながら遊んだことが1番の成果です。しかし、道具の不足もあり、改善すべき点も見つかりました。子どもたちや教職員の方々との交流の中で生まれる会話や笑顔から、この地で再び歩き出すための努力や新たな地域のつながり、その力強さを肌で感じることができました。今後の活動を通して、川内村全体の魅力を多くの人に伝えていき、復興の一助になりたいと考えています。

参加者の声

「将来教員を目指す大学生といろいろ話す機会となり、貴重な時間でした」「川内村をたくさんの大学生が歩いている姿に、勇気をもらえました。取組は来年も継続して欲しいです」「大学生があれほどの準備をされていたことに感動しました。子どもたちの人数は多くはありませんが、ひとりひとりが十分に楽しむことができました」

取組の概要

震災以降、これまで楽しく生活していた浪江町の住民は広域避難でバラバラになり、もともとあった地域コミュニティが失われました。そこで、いわき市に避難している町民を対象に、以前のように町民同士が交流し、生きがいを見つけるためのコミュニティとして、誰でも気軽に参加できるグランマキルト会を立ち上げました。教室に参加することで笑顔が育まれ、孤立や疎外感を軽減し、生きがい、やりがいにつなげることを目的としました。



取組の様子

グランマキルトの教室は、浪江町役場いわき出張所内スペースで行いました。いわき市に避難している浪江町民の女性の方々が参加しています。教室では、カタログの見本からバッグ、ポーチ、ショルダーバッグなどの制作キットを購入し、講師の指導を受けながら作品を作っていきます。教室にそれぞれが作品を持ち合い、町民同士でわからないところを聞き合い、教え合っています。毎回楽しく和気あいあいとした雰囲気に包まれており、できあがった作品について批評や褒め合うなどの交流を図っています。

また、制作した作品は「道の駅なみえ」から依頼を受け、展示を行なっています。自分たちが作った作品を展示することも参加者のモチベーションにつながっています。

避難によって地域との関わりが薄れ、家に閉じこもりがちになっていた方もいましたが、教室を訪れ、交流や触れ合いを行うことで、笑顔が増えていきました。こうした取組が町民同士の心のつながりを深め、心身の健康を守るものになっています。

実施者の声

家にこもりがちだった頃に比べると、この教室に参加したことで、皆さんはとても生き生きと生活されているように見えます。また、一人で作品を作るよりも、皆さんの作品を見ることで刺激を受け、さらにやる気が増すという傾向にあります。浪江町で展示会を年に数回行うことで、遠くに避難している方から連絡が来ると言う声も聞こえています。今後も常に向上心を持ち、いつも笑顔で和やかな居場所を作っていきます。

参加者の声

「教室に来て、みんなの顔を見て、お話をするのが楽しみです」「現在の浪江町の状況を聞くことができるなど、情報交換ができます」「外に出るきっかけができて、ストレス解消になっています」「一人で作品を作るより、皆さんとお話しをしながらだと作品作りが進みます」「完成した作品を批評し合い、褒めてもらえるのが嬉しいです」

取組の概要

震災から13年が経過し、一部の復興拠点はややく人の住める場所になりましたが、復興住宅以外に居住している人はまだいない状況です。農産物の栽培には制限があり、営農については依然として心配があります。そこで、浪江町の津島復興住宅に居住する方と、津島を応援して下さる方を対象に、安心して津島で生活し、人々が立ち寄れる場所にするを目的に、創作料理教室と「原発事故による避難がもたらした住民の選択とこれから」をテーマにした討論会を行いました。



取組の様子

本取組は、今年度に避難解除された津島地区にある浪江町津島支所で行いました。第1部は、津島復興住宅に居住者を中心とした浪江町の住民とこの会の代表者の避難先である福島市の住民、そして、第2部には第1部に加えて、チラシを見て開催することを知った浪江町の住民とその関係者が参加しました。

第1部は浪江町と近隣地域の食材を使った創作料理教室で、シェフに考案していただいたメニューを、シェフの指導のもとキッチンカーで参加者が料理をしました。第2部は、地域の安全に対する不安を一緒に考えるために、浪江町赤宇木で放射線測定を実施しながら相談にあたってきた大学教授と、原子力規制委員会を経て、退任後は飯館村でも生活しておられる飯館村放射線アドバイザー、そして、フリーアナウンサーの3名による討論会を行いました。

第1部は料理と食事の会であり、皆さんが積極的に楽しく参加されていました。第2部は放射線量という数字だけではなく、人の営みを大事にした具体的なお話を経験豊富な専門家から聞くことにより、安心感を得ることができました。福島市内からの参加者が、他人事から自分事として考えていきたいという感想を話されていたのが印象的でした。

実施者の声

取組について、避難解除になった津島地区に対する地域外の方々の反応は大きいものでした。しかし、津島に居住している人が少ないことと、津島出身者の関心が薄いように感じました。そのため、今後は浪江町津島の復興住宅の住民と、通行者が立ち寄れる場所づくりを行う予定です。また、津島の名産でもあるエゴマの栽培とエゴマの搾油粕を餌にして東京農業大学で繁殖しているチャボを飼育するなど、津島地区の活性化を考えていきます。

参加者の声

「今回考案された創作料理のメニューが、津島に新しくできる居場所で食べられる日が早く来て欲しいと思いました」「放射線の問題の話をお二人から聞くことができ、大変勉強になりました」「原発事故の問題は、科学的理解だけでは進みません。社会的・心理的な複雑な問題とすり合わせていく必要があると思いました」

さあ行くべ!
つしま肉まつりによる住民同士の交流事業

取組の概要

原発事故で地区全体が帰還困難区域となった津島地区では、住民がバラバラになり、もともとあったコミュニティがなくなってしまいました。しかし、津島地区に住んでいた住民同士が交流するきっかけが欲しいと思い、震災前には毎年盛大に開催されていた津島地区のバーベキューイベントを、令和5年3月に特定復興再生拠点区域として一部地域の避難指示が解除された地元津島で開催。地区のにぎわい創出と、住民同士の交流によるつながりの強化を図ることを目的として企画しました。



取組の様子

「さあ行くべ!つしま肉まつり」は、三連休の最終日となる11月5日に、津島地区の避難指示解除区域内にある浪江町つしま活性化センターで開催しました。

バーベキューは、会場内にテント14張と56台のバーベキューコンロを設置して行い、ピーク時には焼肉の白煙で会場内が真っ白になるほどでした。ステージでは、南津島郷土芸術保存会による田植踊りと神楽、地元出身アーティストのライブ、福島市の団体による阿波踊りが上演され、観客を大いに沸かせました。出店ブースでは、かぼちゃまんじゅうやなみえ焼そばなど6店舗の出店があり、どの店も賑わっていました。

また、館内では震災前に津島地区を撮影した写真のパネル展示を行いました。皆さんは懐かしそうに写真に見入り、当時の様子を語り合っていました。

今回のイベントには、県内外から約400人が訪れ、バーベキューを楽しみながら、互いに近況報告や思い出話をする姿や、ステージイベントに笑顔で参加する様子が多く見られ、和やかなムードの中、参加された方々同士の交流が深まりました。

実施者の声

県内外から多くの方に参加いただき交流が深まりました。バーベキューが予約制だったため、せっかく来ていただいたのにバーベキューに参加できない方がいたこと、またステージイベント終了とともにお客様がいなくなってしまったことも今後の課題となりました。今年度は、事業の初年度だったことから町事業としてイベントを実施しましたが、次年度以降は、地区住民の方々が主体となった形で事業を継続していきます。

参加者の声

「おいしくいただきました。来年度も友人を呼びたいので、ぜひ開催して欲しいです。炭火に癒しを感じました」「移住してきて初めてのイベントでした。ほんわかした空気の中、笑顔で過ごすことができ、ホッとした感じがしました」「来年もずっと続きますようにと願っています。炭焼きで食べるお肉は最高でした。津島に光あれ!」

取組の概要

飯館村は今も避難者が多く、特に村内には若い世代の帰還者が少ない状況です。また、震災以降、住民同士の交流の機会も減少していました。そこで、震災前のように交流する場として駅伝大会を実施し、コミュニティの再構築を図りたいと考えました。大会には、村外からも参加者を募り、新しいつながりを生み出すとともに、地域経済の活性化と飯館村の魅力の発信につなげたいと考えて事業に取り組みました。



取組の様子

本取組では、いいたてスポーツ公園の施設を活用して1km周回コースを設定しました。夕方から夜にかけて小学生1km、中学生2km、一般3kmの3部門に分かれ、4人1組で行う駅伝大会を実施しました。

駅伝の参加者は、飯館村の住民だけではなく、近隣の市町村からも幅広く募集し、小中学生から一般まで計53チームが参加。世代や地域を超えた交流の場を創出することができました。駅伝大会を通じて、参加者同士が競い合い、ゴール後に喜び合う姿や、自チームだけでなく他チームの応援をする姿を見ることができ、参加者同士が新しいつながりを持つことができました。

また、計測業務を専門業者で行い、個人成績やチームの成績を正確に計測しました。これにより、タイム表を見て、参加者同士が健闘し合う姿も印象的でした。さらに、競技中には音響や実況を行い、参加者だけでなく、観覧者にも楽しんでもらえる工夫も行いました。飯館村の生産物などの展示をしたこと、またスポーツ施設を会場にしたことで、飯館村の新たな魅力を感じていただくこともできました。

実施者の声

今回の取組では、小学生の部、中学生の部、一般の部を設けることで幅広い世代が交流を深め、新たなコミュニティができたと感じています。チームでタスキをつなげることで、参加者同士の団結力が生まれ、絆を重ねることができました。

村外からも多くの団体が参加し、競技を通じた新たなつながりを創出できました。参加者の笑顔をたくさん見ることができて、とても良かったと考えています。今後も飯館村名物の大会として広く知れ渡るように取組を継続していきます。

参加者の声

「他のチームに負けてしまったので、来年またリベンジしたいです」「駅伝を初めて経験しました。ゴールした後の達成感は格別で、とても爽快でした」「優勝できて嬉しかったです。また参加したいです」「いろいろな人と交流できて楽しかったです」「また、来年度もぜひ参加したいと思っています」

取組の概要

震災から13年が経過し、都路町の帰還率は95%を超え、元の町に戻ってきています。しかし、町内では少子高齢化が進んでいます。本取組ではこの地域を将来に残すために、未来を創る人間性豊かな都路っ子の育成を目的としました。主体的に学び、豊かな心を持った子どもたちを育てるために、都路町の幼稚園児、小・中学生、交流を図っている葛尾村小中学校及び地域住民を対象に小さくても魅力のある学校づくりを行いました。



取組の様子

取組では、地域の子どもたちがマジックを觀賞し、交流を図りました。子どもたちがマジックを通して心を癒し、楽しむこと、また困難な物事に勇気を出して立ち向かう姿勢などを学ぶことを目標にしました。具体的には、マジシャンの補助やワークショップを行い、子どもたちが年齢を越えて協力し合うこと、挑戦・協働・自律などを主体的に学ぶことを計画しました。マジックの不思議さは、好奇心が旺盛な子供たちにとっては、とても興味深いものです。マジックを目の当たりにし、「なぜ、常識では考えられない不思議なことが起きるのか」と疑問を持ったり、その理由を考えたりすることは、物事を深く探求する好奇心を刺激してくれます。

当日の子どもたちは、マジシャンの一挙一動に大きな声を上げたり、マジシャンからプレゼントされたマジックの道具を使って自分たちでも実践するなどし、参加者全員で楽しみながら、有意義な時間を持つことができました。取組をきっかけに、子どもたちの学びを支援することで地域への思いを育み、将来的には地域に定住してくれるような環境づくりを目指していきます。

実施者の声

本取組は「子ども同士」「教師と子ども」「子どもと家族・地域」とをつなぐツールとして、子どものコミュニケーション能力をはじめとする、自己肯定感、創造性チャレンジ精神、自信等を向上させるものとなりました。来場者は子どもだけでなく、地域住民の方々も多く、全員を感動させることができました。今後も、小さくても魅力ある学校づくりについて、地域住民の協力を得ながら継続的に取り組んでいきます。

参加者の声

「マジックを間近で見るのは初めてで、トリックにビックリしました。とても楽しかったです」「今回のマジシャンの方のように、自分も感動を与える技術を身に着けたいと思いました」「ぜひ、またこのような機会をつくって欲しいです。いろいろな体験ができる嬉しいです」

取組の概要

飯舘村の再生と住環境の回復促進を目的とし、地元の住民、地域外からの参加者、観光客、地域との新たなつながりを求める方々を対象とした取組を行いました。交流人口の増加を通じて、地域の明るさと活気を再構築し、住民の帰還促進や新たな移住者の受け入れを促進していくことで、地域経済の発展も目指しました。本取組では、キャンドルワークショップや打上げ花火などを行うことで、地域の魅力を再発見してもらうことを目的としました。



取組の様子

キャンドルワークショップは、交流センターふれ愛館ホールで開催しました。イベントには飯舘村の住民だけでなく、村外に避難している方々や村外からの参加者も含め、広範な層が参加しました。

キャンドルワークショップでは、異なるバックグラウンドを持つ方々が交流の機会を得ることができました。参加者たちは互いに協力し合い、地域の伝統や創造性を感じながら楽しく作業を行いました。会場の和やかな雰囲気、交流を促進し地域の連帯感を高める効果をもたらしていました。

飯舘村の冬花火イベントは、道の駅までい館で開催しました。イベントには、地域外からの観光客や地元の住民、冬の澄んだ空気を楽しむために集まったファミリーや友達グループなどが多く集まりました。来場者に美しい花火ショーを提供することで地域の魅力をアピール。イベントの雰囲気は幻想的で特別なものになりました。来場者たちは、この幻想的な雰囲気の中で、地域の自然や文化を存分に楽しむことができ、地域への愛着や観光促進につなげることができました。

実施者の声

地元素材を使用したアロマキャンドルボックス制作と打上げ花火の組み合わせは、季節に特化した体験を提供し、地域独自の雰囲気を最大限に活かすことができました。訪れた人々に驚きと感動を与え、地域内外から多くの来場者を呼び込むことができました。取組を行うことで、地域経済にプラスの影響を与え、地域の店舗や事業所への顧客数が増加するなど、地域全体の活性化が強化されました。今後も、地域住民とのコミュニケーションを深め、地域全体で協力しながら、長期的な発展に向けた取組を進めていきます。

参加者の声

「講師の方が丁寧に指導してくださり、きれいなキャンドルボックスを作ることができました。とても満足です」「作業は簡単な工程でしたが、素敵なものことができました。機会があれば、ぜひまた作ってみたいです」「花火が夜空に映えて幻想的で、とてもきれいでした」「冬に花火を見る機会がなかったので貴重な機会になりました」

取組の概要

震災から13年が経過しましたが、避難先で生活をする上で地元の方々とのコミュニティ形成は長年の課題です。そのため、取組では被災者と避難先の地元の方々、行政機関などとの交流を深めることを目的に、半年に渡って「草木染め教室」を開催しました。教室には主に地元の方々が参加しました。開始冒頭には“震災を風化させない”をテーマに被災地の現状の理解活動も行いました。講師も被災者で、避難先で教室を営み、地元との交流に以前から尽力されている方を選任しました。



取組の様子

6月から準備を開始して、8月から11月にかけて計8回の教室を、避難先である那須塩原市の二つの公共施設で開催しました。草木染めを主とした「藍生葉の草木染」「藍でリネンストールを染める」「ブリザードフラワー」「レンジでチンの草木染め」の各教室への参加者は、被災者が延べ29名、地元の方が延べ45名となりました。

今回の取組の趣旨が、“地元の方々とのコミュニティづくり”であったため、どのように地元の方々に参加してもらうかについて、当会事務局にて検討した上で、各所に相談を行いました。結果的に、地元の町内会長による町内回覧による参加者募集、行政施設担当者によるチラシ作成と掲示、新聞販売店による無料折り込みなどの広報を手伝っていただくことができました。また、この他にも荷物の運搬、会場設営など、地域の方々にさまざまな形で支援していただけたことも、活動を通じた関係作りにつなげることができました。教室の会を重ねるごとに、関係者との一体感が醸成され、新たなつながりを感じる機会を創出することができました。

実施者の声

当会による取組は昨年続く形となりますが、今回の取組を通じて改めて、被災者と地元住民とのコミュニティづくりの必要性を認識することができました。“高齢と孤独”の不安を抱えながら過ごす被災者にとって、地元の方との関わりは非常にありがたいものであり、生きがいの根幹を成すものです。私自身にとっても、生涯生活していく上で大きな財産となりました。今後も、近隣に暮らす被災者のために活動を続けていきます。

参加者の声

「草木染めの色合いのすばらしさを堪能することができました。世界に一つしかないオリジナルの作品は宝です」「今回、はじめての被災者の方との交流することができました。丹念な染の作業を一緒に行いながら、さまざまなお話ができたことは忘れられません」

取組の概要

川俣町には、避難区域となった山木屋地区と避難区域とならなかった二つの地区が存在しています。そのため、町内の地域住民同士のつながりが希薄になっています。そこで、本取組では、地域住民同士と一緒に「ポーセラーツ」や「ローソク」作りを行うことを企画しました。気持ちをワクワクさせながら、世界にたった一つの作品を隣り合って作り、言葉を交わしあうことができれば、関係性が一步進むと考えました。



取組の様子

本取組では避難区域となった山木屋地区で、避難者と避難とならなかった住民がバランスよく参加して交流することができるようにしました。作品作りの工程では、互いにアドバイスをするなどして助け合い、できあがりを褒め合うなど、終始和やかな雰囲気に含まれていました。また、できあがった作品は展示をし、今回は参加されなかった住民の方々への周知も行いました。教室を2回開催したことで、1回目に顔見知りになった方同士が言葉を交わし、初めて参加された方にも声を掛ける姿を見ることができました。そして、この教室を通じて、さらに参加者同士の関係性が深まりました。

また、最大の成果は、取組に参加したことをきっかけに避難の有無にかかわらず住民同士が顔見知りとなり、日常生活の中でも挨拶を交わし、立ち話をする姿が見られるようになったことです。1回目に参加された方が2回目に友人を誘うなどし、コミュニティとしての広がりも見ることができました。

実施者の声

開催回数は多くはありませんでしたが、これまで町ですれ違っても声をかけ合うことが無かった方々が、一緒に作品を作ることで言葉を交わすきっかけができました。同じ時間を過ごしたことで顔見知りになり、町中でもお互いに声をかけ合えるようになったことは大きな成果です。応募者も多く、「また作品を作りたい」「回数を増やして欲しい」との声も多く聞かれましたので、次年度以降は、回数を増やして多くの方々の交流の機会を創出していきたいと考えています。

参加者の声

「皆さんと一緒に、楽しく作品作りができました。町内で見かけたことのある方が参加していたので声を掛け、お互いにびっくりしましたが仲良くお話しすることができました」「もっと回数を増やしていただけると嬉しいです」「孫と一緒に参加したいので、休日にも開催してください。孫を川俣に呼ぶ口実になります」

取組の概要

震災前、夏の風物詩として知られていた木戸川の鮎釣りは、毎年解禁日から1,500人以上の釣り人が足を運ぶほどでした。しかし、放射線量の影響で令和3年まで釣りの解禁が行われませんでした。今年度は、11年ものブランクを経た木戸川の鮎釣りを身近に感じてもらえるよう、木戸川鮎祭りを実施。祭りを通して、檜葉町の観光資源としての木戸川の魅力を伝えるべく、檜葉町の小中学生を主に対象とし、他地区との交流を図ることを目的に取組を行いました。



取組の様子

本取組では、子どもたちに鮎釣りの楽しさや鮎の魅力伝え、将来的に鮎釣り人口の拡大を図ることを目的としました。さらに、檜葉町特産物の販売や縁日コーナー、キッチンカーによる飲食物の販売などを行いました。

鮎祭りの当日は、木戸川河川敷にイベント会場を設け、小中学生による鮎釣り大会を開催。大型のプールを設置した鮎のつかみ取りや鮎の塩焼きを提供し、地元の方や近隣の町村の方と子どもたちに木戸川の鮎の魅力伝え、身近に感じてもらうように取組を行いました。地元農家や飲食店関係者の協力のもと、檜葉町の特産物等を提供し、家族連れにも楽しんでもらえる工夫をしました。夏休み期間の開催でもあったため、子ども向けの出展ブースのコーナーを充実させました。子どもたちも、夏祭りの雰囲気満喫できたようです。

当初は、500人程度の来場者を想定していましたが、実際には1,200人ももの来場者がありました。木戸川の鮎と檜葉町の特産物に対する風評被害払拭する場ともなり、木戸川を身近に感じてもらえる機会を創出することができました。

実施者の声

多くの方にご来場いただき、大変好評を得ることができました。今年度は、特別な暑さの中の開催だけに、救護等準備は万端ではありませんでしたが、炎天下の屋外のイベントとしては設営に十分に気を配る必要がありました。このイベントを通して、参加者同士が地域との交流を図ることができました。さらなる地域活性を目指した、次につながるイベントとして地域で定着させていく目標ができました。

参加者の声

「親子で参加しました。木戸川の鮎を満喫することができ、屋外での夏休みの楽しい思い出をつくることができました」「初めて参加した鮎釣り大会で優勝することができて、嬉しかったです」「鮎の塩焼きがとても美味しかったので、来年も開催してもらいたいです」

取組の概要

本取組では大熊町の子どもたちを中心に、双葉郡の子どもたちや親子も招待し、お天気キャスターとお天気キャラクターを講師として、震災・防災・環境問題・エコ・気象などをテーマにした公演や劇を行いました。催しの途中には防災や環境に関係したクイズをはさみ、実際に災害が起きた場合の対策などを、子どもたちにも分かりやすく解説しました。防災について親子で楽しく学べる取組となりました。



取組の様子

本取組は被災12市町村の親子を対象に、震災後に大熊町に建設されたlinkる大熊で行いました。お天気キャスターとお天気キャラクターを講師に迎え、スクリーンを使って防災や環境などのお話をしました。普段テレビで見たことのあるキャラクターが登場したこともあり、どの子どもたちも真剣に映像を見て親子で熱心に話を聞く姿が印象的でした。

学んだことを振り返るおさらいクイズを挟みながら、わかりやすく解説していただきました。クイズの場面では子どもたちが積極的に参加して回答し、盛り上がりを見せていました。

災害や防災について、楽しく学ぶことができ、結果的にいつ起きるかわからない災害に備えて、親子で準備する心構えを醸成することができました。

震災から13年の月日が経ったこともあり、震災を経験していない子どもたちが増えました。そうした子どもたちに、震災を風化させることなく伝え、子どもたちが未来に向かって自分を守るための学びに、貢献したいと考えています。

実施者の声

取組を通じて、震災・防災・環境問題・エコ・異常気象などの、いつ起きるかわからない災害に対し準備出来る対策と災害時の対応をもう一度再認識していただきたいと考えています。また、災害を未然に防ぐ準備も大切です。大熊町は帰還している方が少ないこともあり、次年度以降は、参加者を増やすための工夫が必要だと考えています。そして、今後起こりうる災害に対する準備は不可欠であると考えており、継続してこの取組を実施していきます。

参加者の声

「震災後13年が過ぎて震災の記憶が薄れて行く中で講演を聞き、災害に対しての準備の大切さを再認識できて良かったと思います」「子どもたちの学校での避難実験の映像が衝撃的でした」「県内12市町村の違う地域でも行ってほしいと思いました」「学びになるので、クイズを多くしていただきたいです」